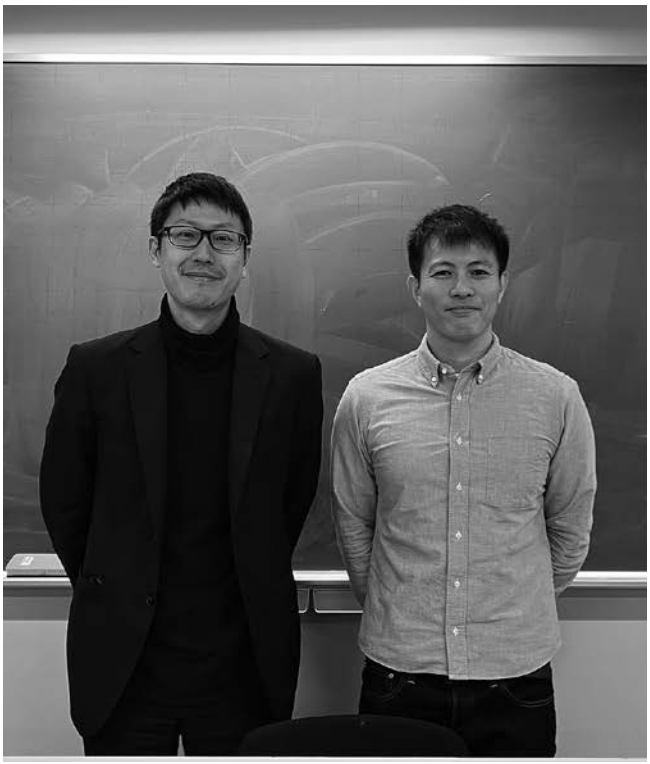
講演会

「人と水の関係から、水泳を考える」

人間科学部　人間科学科　北岡 祐

２０２４年１月９日に神奈川大学人文学会主催の「人と水の関係から、水泳を考える」というタイトルの講演会が開催されました。ご講演頂きました鹿屋体育大学講師の成田健造先生と北岡は、公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ研究助成の２０１５年度・第９期生として同期（この研究助成は授賞式および報告会がヤマハリゾートつま恋［当時］にて合宿形式で行われる大変ユニークなもので、年代の近い若手研究者が交流できる貴重な機会でもありました）であり、その後のご活躍をネットニュース等でも拝見しておりました。北岡ゼミには運動部に所属する、あるいは過去に所属していた学生が多いことから、ぜひ一度神大でお話を伺いたいと思っていましたが、この度ようやく機会に恵まれました。



（左）人間科学部教授・北岡祐、（右）鹿屋体育大学講師・成田健造先生

講演では、競技者として水泳に取り組まれていた学生時代のお話から現場でのコーチとしての経験も背景として、最新の水泳研究の成果についてお話頂きました。まずはじめには、空気と水の密度の違いについての問いがありました（答え：水は空気の約８００倍）。つまり、水の中を進まなくてはならない水泳では「抵抗力」を考慮する必要があり、その点で陸上の競技とは大きく異なることに注意しなければなりません。たとえば、競技者が推進力を高めることができたとしても抵抗力がそれ以上に大きくなれば結果として減速する一方で、推進力が同一であっても身体が受ける抵抗力を小さくすることができれば泳速度は高まることになります（抵抗を制する者、勝負を制す）。

しかし、実際の水泳中の抵抗を正確に計測することは大変に困難なチャレンジであり、従来の常識をアップデートしてきた今回のお話は様々な競技に取り組む学生たちにとって大変良い刺激になったのではないかと思っております。

参加した学生からの感想としては以下のようなものが寄せられていました。「水泳に苦手意識があったが、このような科学的背景を知る機会がもっと早くあればよかった。」「当たり前とされているものを言われた通りに受け入れるのではなく、自らの疑問を大切にして展開させられるようになりたいと思った。」「最先端の研究成果を選手に伝える指導力によってスポーツの結果は大きく変わる可能性があると感じた。」「競泳に限らず様々な場面で色々な情報をどのように自身に落とし込むか、また相手に伝えるのか、を考えたいと思った。」

最後に、ご講演の中で最も印象に残ったことの一つは、「クロールのバタ足、速くなる効果なしむしろ水の抵抗増（朝日新聞デジタル）」のような形で多くのメディアに取り上げられた際の対応についてでした。社会にインパクトを与えるような記事が求められる中で、研究の成果をわかりやすく、かつ正確に伝えることの大切さと難しさを改めて感じたご講演でした。

北岡ゼミの学生を中心とした当日の集合写真